

「レビの食卓」

(マルコ2:13～17)

挽地茂男

2018.10.7 千歳丘教会世界聖餐日礼拝

今日は、世界聖餐日・世界宣教の日です。世界聖餐日は「世界が戦争〔第二次世界大戦〕へと傾斜していく中で、1940年に北米キリスト教教会連盟が「全世界のキリスト教会がそれぞれの教会で主の聖餐式をまもり、国境、人種の差別を越えて、あらゆるキリスト教信徒がキリストの恵みにおいて一つであるとの自覚を新たにする日」として提唱しました。世界が戦争に向かって厳しく対立を深めていく中で、キリスト者は国境と人種と戦火を越えて一つになろうという精神の下に世界的に約束された日がこの日の始まりなのです。



これが戦後、世界教会協議会(WCC)で推奨され、日本キリスト教協議会(NCC)を通じて日本の教会にも広がりました。異なる文化・経済・政治の状況にあってなお、世界の教会がパンとぶどう

酒つまりキリストのからだと血を分かち合うことを通して、主において一つであることを自覚し、お互いが抱える課題を担い合う決意を新たにする日なのです。また同時に、日本キリスト教団ではこの日を「世界宣教の日」とし、世界各地に派遣された宣教師を覚え、その活動を祈りと献金をもって支える日にもなっています。

世界聖餐日は――理想型として――世界が一つの食卓につく日なのです。この食卓は、紀元1世紀ローマ帝国の辺境とも言うべきパレスチナで宣教のために立ち上がった主イエスの食卓から始まりました。キリストの教会は最初から食卓の共同体として出発したのです。聖餐式はこの食事を出発点として、これに加えてさらに、旧約から終末に至る四つの食事、合計五つの食事(食卓の物語)が重なり合って、時(代)をかけて一つの定まった形、聖餐の食卓に結晶化したものなのです。



本日の聖書箇所は、マルコによる福音書 2 章 13 - 17 節の「レビの召命」の物語です。このレビの物語には、主イエスが徴税人や罪人たちと食事をする場面が出てきます。この場面には、主イエスの食卓の特徴である、差別のない「**赦し**」と「**自由**」と「**開放性**」がよく現れています。わたしたちは、今、礼拝でマルコ福音書の「第二論争物語集」を読んでいます。

11 章の後半から、エルサレム神



殿の境内で、主イエスとユダヤ教の宗教指導者たちとの

論争が始まりました。「何の権威によってこのようなことをするのか」と権威に関する論争を皮切りに、この後 5 つの論争が続いていきます。さて、今日の箇所は「第一論争物語集」(2:1-3:6) です。主イエスのガリラヤ宣教の初期になされた 5 つの論争が集められて

います。まず最初に、今日読むレビの物語が、この論争物語集の中で、どのような位置をとっているかを確認しておきたいと思います。

「第一論争物語集」に収められた 5 つの論争物語は、独特の配列の仕方で並べられています(上記の図表参照)。一般に、^{キアスムス}交差配列 (Chiastic Structure) と呼ばれる、旧約聖書によく見られる配列の仕方をとっています。つまりこの論争物語集の 5 つの物語に A, B, C という風にアルファベットで順番をつけていくと、A-B-C-B'-A' という配列 (構造) になるのです。A と A'、B と B' には共通するテーマを含んだ物語が配置されます。今日のレビの物語は、B (前から 2 番目) の物語で、その B - B' の B にあたる部分です。共通テーマは食事です。この^{キアスムス}交差配列的構造では、A-B-C-B'-A' という扇のような形の、その扇の要にあたる C の物語が、この扇全体の意味の中心となります。つまりこの「第一論争物語集」では、断食問答 (2:18-22) が全体 (扇全体) の意味を総括しています。その意味は主イエスが語る次の言葉に表されます。

- A (2:1-12 中風人の癒し)
- B (2:13-17 取税人や罪人との食事)
- C (2:18-22 断食問答)
- B' (2:23-28 安息日の穂摘み)
- A' (3:1-6 片手のなえた人の癒し)

「新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるものだ」(2:22)。

この言葉に表されるように、新しいぶどう酒つまり福音(主イエス)の新しさは、新しい革袋つまり新しい態度によって受け入れられなければならない、という意味です。ですから、「第一論争物語集」に収められたファリサイ派や律法学者たちと主イエスの5つの論争物語は、「古い革袋」としてのファリサイ人や律法学者に象徴される古い生き方を、主イエスが



レビの召命

示す新しい生き方が突破する出来事を告げているのです。それでは、レビの物語における「新しさ」とは何でしょう。1つは「招き」の新しさ、つまりその招きは、罪人を招く「罪人への招き」なのです。もう1つは食事の新しさ、つまりその食事は、罪人を食事の友とする「罪人との食事」なのです。

今日の箇所では主イエスは、「わたし…は…罪人を招くため」に来たと言われます。これがこの物語が示す主イエスの教えと活動の第

1の「新しさ」です(2:13-14)。

2:13主イエスが、再び湖のほとりに出て行かれると、群衆が皆そばに集まって来ます。いつものように主イエスは彼らを教えます。2:14そして通りがかりに、アルファイの子レビが収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい(Ἀκολουθεῖ μοι)」と言われます。すると彼は立ち上がって(ἀναστὰς)主イエスに従っていた(ἠκολούθησεν αὐτῷ)のでした。主イエスは社会のエリートでない者を招くのです。徴税人とは当時の軽蔑的な職業の一つでした。当時のユダヤ社会で罪人という場合も、単なる法律違反者だけを指しているわけではありません。軽蔑的な職業に従事する者たちは、罪人と呼ばれたのです。例えば、「羊飼ひ」は何か牧歌的のどかで、どことなく善良な雰囲気を持っていますが、定住牧畜業者を除いて、羊の食べる草を求めて移動する遊牧生活を強いられます。ですから安息日だ、礼拝だと言って、羊を放置しておくことはできないのです。必然的に彼らは安息日を守ることができなかったのです。このような職業の特質上、

彼らは、その職業についているだけで「罪人」と呼ばれるようになったのです。「徴税人」と呼ばれる職業は、異邦人つまりローマ帝国の徴税業務を代行するものがありますから、もちろんのこと、軽蔑的な職業の最たるものだったのです。

当時の徴税のシステムは、ローマ帝国の繁栄を支える最も重要なシステム(制度)のうちの1つでした。まず首都ローマで、入札によってローマ人の徴税を請け負う〈徴税請負人(Publicanus)〉が選定されます。この徴税請負人は——ローマ人の新興貴族にあたる騎士(エクイテス)階級の人々が多く——属州の徴税業務(や公共事業)を総督にかわって行います。そして請負い金額が決定されると、契約が成立します。あとは自由裁量になるので、徴税請負人は事業収益を得るために、契約した金額より多くの税額を徴収して、差額を総督の収入とする場合がありますが、多くの場合、それによ



って私腹を肥やし、富豪に成長するものが多いのです。〔こ

の富裕層が後にローマの階級構造を変えてくることになります。〕

しかも徴税請負人は実際の業務を、現地の業者を雇って遂



行したのです。ルカ福音書に登場するザアカイはこの種の業者だったと考えられています。さらに、この業者が元締めになって、自分の下に子飼いの徴税人を雇います。子飼いの徴税人が税を徴収しますと、彼から元締めへ、さらに元締めから徴税請負人へ、徴税請負人から属州総督およびローマ当局へと税金が吸い上げられていくのです。その吸い上げのシステムの中で、徴税に関わる全ての徴収者が自分の利益を確保することを当然のこととしていたため、

民衆は、この税金吸い上げの構造的な搾



取によって苦しめられたのです。直接税としては土地収益税、人頭税、間接税としては国境関税(物流にかかる税金)、道路や橋の通行税などが徴収されました。

ですからローマ支配の過酷さを最も切実に味わったのは、ローマ皇帝ないし元老院によって直轄支配される属州民でした。この帝国



支配を具体化（体现）したのが、ローマの租税のシステムだったのです。アウグ

ストゥスは人口調査を実施して〔人口調査は、徴税・徴兵・徴用の基礎作業〕、辺境の一寒村にまで一大徴税網を張り巡らしました。そのため、パレスチナのユダヤ人は過酷な経済生活を強いられることになります。福音書の描く主イエスの活躍する世界には、毎日の糧にもこと欠く賃貸小作人、日雇い労働者、貧しい漁師、羊飼いが登場します。それは、ローマ皇帝、ヘロデ王家一族、祭司、貴族、徴税請負人や徴税業者による富の独占を可能にした一大徴税網に収奪された、ローマの辺境に位置する属州の、都市の繁栄とはかけ離れたパレスチナの農村や漁村の図なのです。そこに「貧しい者は幸いである」と語って立ち上がった方がいたのです。

さてレビはどうしてこの実入り

のよい職業を捨ててしまったのでしょうか。ユングという心理学者に「ペルソナ」という概念があります。このペルソナという概念を、人間の自己疎外の状況を説明するために用いることがあります。ペルソナ Persona という言葉はラテン語で、ここから英語の Person（人柄、人格）という言葉が派生してきます。しかし元来このペルソナ Persona という言葉は、ラテン語では〈仮面〉という意味の言葉です。ローマの仮面劇で使われる仮面のことです。我が国にも〈お能〉という優れた仮面劇があります。そこでは、仮面は役割を表します。その仮面に託された役割を、役者やお能の仕手が演じきるとき、一幕の舞台が完成するのです。わたしたちは社会に生きる限り、何らかの役割を担わなければなりません。社会に生きていく限りは必然なのです。つまりある意味では、社会人は〈仮面〉をかぶらなければならないのです。商談に当たる



人たちは、一応の笑顔を作り、丁寧・丁寧な言葉でお客様に接して初めて、商談も成立するでしょう。そのような職業的役割が、ぴったりと自分に適していることもあるでしょう。何とかその役割をこなしている場合もあるでしょう。そのとき彼のかぶっているお面は、自分自身の顔とほとんど一つになっているか、あまり違和感がないと言っているかもしれません。しかし逆の場合もあります。自分は総合職を希望していたのに、営業職にまわされて、将来的には総合職に配属替えということもあるが、とりあえずは外回りを二年ほど積んでからの話だとなったとき、彼は持前のヴァイタリティーで難なく、その二年を乗りこえてしまうかもしれません。しかし他方、次第に、仕事への情熱を失い、心からの笑顔を失い、笑顔で商談に当たることが苦痛になることもあるでしょう。そして徐々に仮面

と仮面に隠れた自分とが乖離し始めるのです。その乖離が極まったとき、仮面に隠れた本当の自分が叫び出すのです。遠藤周作は、ユングの理論を参照しながら――罪と悪とを区別して――罪は、「社会的自己以外の（仮面に）埋もれた自己の主張であり、したがって社会の中でのいきづまった自己の再生を主張する」と言います。罪には、人間の心の叫びがこめられていると考えるのです。

ローマの徴税網の一端を担う徴税人という職業の中にいた――埋もれていたと言うべき――レビを、主イエスは呼び出されます。レビの心にどのような葛藤があって、そうなったのかは何も書かれていません。召命物語自体は、本質的には、わずか1節で語られています(2:14)。つまり14節で、①主イエスは湖の畔を歩いているとき、職場（おそらく国境税関）にいるレビを見ます。そして②主イエスは招き、レビは従います。レビの心の状態どころか、レビがどんな種類の収税所に座っていたのか、どのような税金を集めていたのか、いくらぐらい手に入っていたのか、ましてや、なぜイエス





に従ったのか、レビがどのような人生経験を経、何を考えていたのか、などについては一切知らされていません。結局、この簡素で直線的な召命物語は、ただ2つのことだけを強調しています。第1に、招かれた人物は徴税人であったこと。それゆえに「罪人」であったこと。第2に、彼はただ「**わたしに従いなさい**」とのイエスの権威ある招きを根拠に弟子になったことです。

主イエスは、罪ある者として、社会的に埋没させられた自己を呼び出されます。レビの物語は、その典型を示す物語です。「**わたしに従いなさい**」という主イエスの呼びかけに応じて、レビは「**立ち上がってイエスに従っ**」(v. 14) たのでした。ただ救いのエッセンスだけが書かれています。それは、主イエスに呼ばれて弟子になった4人のガリラヤの漁師たちの召命の場面と同じです。ヨハネによる

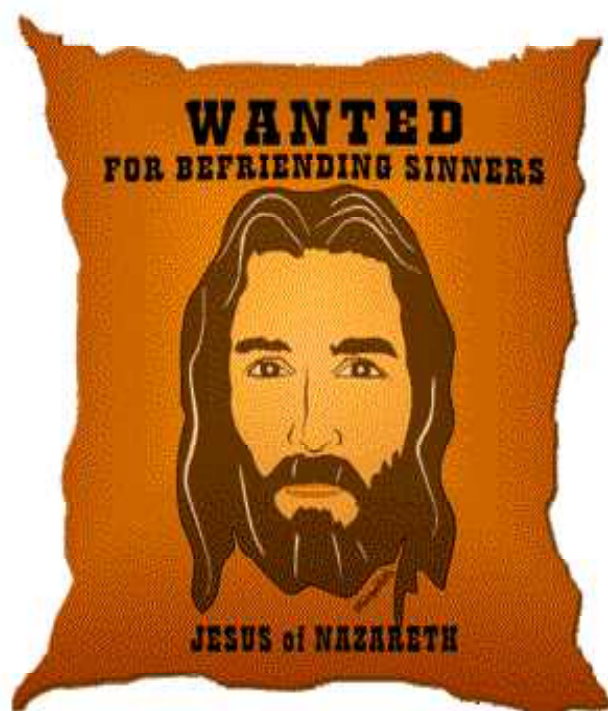
福音書の召命の記事と比較すると、マルコは、弟子たちの召命に関する詳細な情報を大胆にカットして、弟子召命のエッセンスだけを書いていることが分かります。そのために焦点は極めてクリアになります。つまり〈呼びかけるイエス〉と〈従う弟子たち〉がはっきりと浮き彫りになるのです。主の呼びかけに応じて、レビも「**立ち上がってイエスに従**」います。立ち上がるという言葉は、キリストの復活を表す〈アナスタシス〉という言葉の動詞形が使われています。つまりこの物語は、レビの再生の始まりを告げるのです。

彼の再生は、社会的関係の再生として始まります。それが主イエスを中心とした食事によって表現されます。厳格に律法を守るファリサイ派の人々にとって罪人と食事をするなどということはありませんでした。ですから、**2:15 イエスがレビの家で食事の席に着**



いておられたとき、多くの徴税人や罪人もイエスや弟子たちと同席しているのを見ると、2:16……弟子たちに、「どうして彼は徴税人や罪人〔徴税人は罪人と同列におかれている〕と一緒に食事をするのか」と詰め寄ります。2:17（主）イエスはこれを聞いて「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」と、簡単な類比を使って律法学者の詰問に答えます。病人は医者が必要とします。同じように、罪人は主イエスを必要とするのです。その「必要とする」という言葉が、最初に確認した交差配列的構造におけるB－B'に現れます。この2つの物語を結ぶ鍵の言葉は「必要とする」（*χρείαν ἔχειν*）という言葉です。B'の物語では、ダビデは食べ物を必要とした（*χρείαν ἔσχεν*、2:25）時に、神の家に入って供えのパンを食べ、共にいた者にも与えることによって、律法の禁を犯します。同様に主イエスも、彼を必要とする（*χρείαν ἔχουσιν*、2:17）罪人がいる時、掟を超えるのです。主イエスは「罪人を招くため」に来

られたからです。そして主イエスは罪人の友となることによって、自ら罪ある者となったのです。律法学者はそれを見逃すことはできませんでした。今日のお話の直前の2章1－12節〔第一論争物語集のA〕に「中風人の癒し」の物語が置かれています。主イエスは、中風の人を癒やす前に、罪の赦しを宣言します。「子よ、あなたの罪は赦される」（2:5）。すると律法学者は心の中で「この人は、なぜこういうことを口にするのか。神を冒瀆している。神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか」と言います。律法学者にとって、それは冒瀆以外の何ものでもありません



ん。彼らにとって、神でもない、また、神から贖罪の宗教制度（システム）を司どる者として聖別された祭司でもないイエスが、罪の赦しを宣言するなどということは、神を冒瀆する行為以外の何ものでもないのです。彼らの目には、罪の赦しを宣言するイエスは実質的に自分自身を神と宣言していることになるのです。つまり人間が自分を神と等しくすること、これが「**神を冒瀆している**」ということになるのは論理的にはその通りなのです。律法学者にとって、主イエスは、彼を指して「この人」と呼べる以上の存在ではなかったからです。救いはつねに、わたしたちが、主イエスを何者と見るかにかかっています。

主イエスは、罪人の友となり、また罪の赦しを宣言しました。「**子よ、あなたの罪は赦される**」（2:5）。わたしたちの罪の赦しをも宣言されるのです。「**子よ、あなたの罪は赦される**。」たとえ、あなたの心があなたを赦さなくてもです。「赦し」は必要とする者に賜物として与えられます。ヨハネによる福音書3章16節は、人間の価値を計る唯一の絶対的な尺度で

す。「**神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである**。」神の目に、人間は愛する対象としてしか存在しないのです。あなたが自分を愛さなくてもそうなのです。あなたは神の愛の対象なのです。罪の赦しとは、この神の愛に応じて戻っていくこと、そのことによる神との関係の回復のことなのです。ですから中風人の癒しの場合も、「罪の赦し」の宣言が「癒し」よりも大切なこととして優先するのです。そして主イエスが、罪の赦しを宣言すればするほど、ユダヤ教の尺度からすれば、彼は冒瀆に冒瀆の罪を重ねることになるのです——逆説的には、主イエスを冒瀆者・罪人とすることによって、彼らこそが（律法学者や批判者こそが）罪を犯しているのですが。そして最後はその罪を満身に負うように、罪人と同じように、十字架上で死に処せられたのです。



パウロは言います。「キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。つまり、罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。」（ローマの信徒への手紙8:2-3〔新共同訳〕）十字架上で、裂かれた主イエスの肉、そして流された主イエスの血、それは、罪の赦しのために裂かれ、また流されたのです。罪人がそれを必要としたからです。

主イエスはわたしたちの必要をご存じです。何よりも神に立ち返り、神と共に生きることが、わたしたちには必要なのです。そこに生命があるからです。そのために主イエスがご自分の生命をささげたのです。これは恵みです。わたしたちの理解を超えています。罪の赦し(十字架)は、わたしたちを、

わたしたちが生きるべき神の御許に連れ戻す、架け橋です——しかも神の側からかけられた架け橋なのです。それが神の恵みなのです。その架け橋には、主イエスの血の跡がついています。わたしたちは、主イエスの打ち傷によって癒やされました(イザヤ書53章)。その主イエスが今も、わたしたちの魂の医者として、この教会の交わりと共にいてくださることに感謝しましょう。祈りましょう。

2018. 10. 7 千歳丘教会世界聖餐日礼拝



2:13 イエスは、再び湖のほとりに出て行かれた。群衆が皆そばに集まって来たので、イエスは教えられた。

2:14 そして通りがかりに、アルファイの子レビが収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。

2:15 イエスがレビの家で食事の席に着いておられたときのことである。多くの徴税人や罪人もイエスや弟子たちと同席していた。実に大勢の人がいて、イエスに従っていたのである。

2:16 ファリサイ派の律法学者は、イエスが罪人や徴税人と一緒に食事をされるのを見て、弟子たちに、「どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。

2:17 イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

2:13 Καὶ ἐξῆλθεν πάλιν παρὰ τὴν θάλασσαν· καὶ πᾶς ὁ ὄχλος ἤρχετο πρὸς αὐτόν, καὶ ἐδίδασκεν αὐτούς.

2:14 καὶ παράγων εἶδον Λευὶν τὸν τοῦ Ἀλφαίου καθήμενον ἐπὶ τὸ τελώνιον, καὶ λέγει αὐτῷ, Ἀκολούθει μοι. καὶ ἀναστὰς ἠκολούθησεν αὐτῷ.

2:15 Καὶ γίνεται κατακεῖσθαι αὐτὸν ἐν τῇ οἰκίᾳ αὐτοῦ, καὶ πολλοὶ τελῶναι καὶ ἁμαρτωλοὶ συνανέκειντο τῷ Ἰησοῦ καὶ τοῖς μαθηταῖς αὐτοῦ· ἦσαν γὰρ πολλοὶ καὶ ἠκολούθουν αὐτῷ.

2:16 καὶ οἱ γραμματεῖς τῶν Φαρισαίων ἰδόντες ὅτι ἐσθίει μετὰ τῶν ἁμαρτωλῶν καὶ τελωνῶν ἔλεγον τοῖς μαθηταῖς αὐτοῦ, Ὅτι μετὰ τῶν τελωνῶν καὶ ἁμαρτωλῶν ἐσθίει; 2:17 καὶ ἀκούσας ὁ Ἰησοῦς λέγει αὐτοῖς (ὅτι) Οὐ χρειαν ἔχουσιν οἱ ἰσχύοντες ἰατροῦ ἀλλ' οἱ κακῶς ἔχοντες· οὐκ ἠκαλέσαι δικαίους ἀλλὰ ἁμαρτωλούς.